The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラテンアメリカから帝国を宣伝する ： ひとりのアルゼンチン日本移民が語る西洋・オリエント・新世界
Author(s)	ガラシーノ, ファクンド
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 129-152
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55491
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラテンアメリカから帝国を宣伝する
——ひとりのアルゼンチン日本移民が語る西洋・オリエント・新世界

ファクンド・ガラシーノ

はじめに：先行研究と本稿の課題

本稿では、アルゼンチン共和国の先駆的な日本移民と記憶される榛葉賛雄（しんやよしお）（1884–1954）を取り上げ、1930年代から40年代にかけて彼が展開した言論を検討する。榛葉は1900年に渡航し、いち早くアルゼンチンにおける日本帝国や移民社会の代弁者としての意識を育んだ。そして「満州事変」を期に、悪化する対日世論を目の当たりにした榛葉は、ブエノスアイレスの上層市民と協同して、日本帝国の内外政治や戦争の「真相」と日本文化を宣伝する活動に携わることになる。このように、移民社会を代弁しながらホスト社会とも連携し、日本帝国を宣伝した榛葉は、20世紀前半の南米日本移民のなかで注目される存在である。本稿では、1930年代から1945年までの榛葉の言論活動を取り上げ、彼が語った西洋、日本とオリエントを問題にしたい[1)]。

近年、植民地や帝国主義の経験を持つ地域でオリエントを表象することはどのような営みか、という問題がスペイン語圏や英語圏において、ラテンアメリカを主な対象に論じられている。日本移民がアルゼンチンで日本帝国を宣伝したという榛葉の事例がラテンアメリカにおけるオリエント表象の問題を複雑な形で提起していると考えられるため、以下では主要な研究を整理しながら本稿の課題を提起する。

まず、文学研究者のロペス・カルヴォ（Ignacio López Calvo）が組織している学際的研究プロジェクトが注目される。そこでは，近現代ラテンアメリカ文学に現れる中近東や東アジア、そしてこれらの地域にルーツを持つ移民の表象が論じられるとともに、移民とその子孫による文学、音楽や映像なども扱われている。文化人類学やカルチュラル・スタディーズに立脚する考察もなされており、ラテンアメリカにおける文化の混淆性が新たな視角から問題化されつつある。

ここで、E. サイードが提起したオリエンタリズム批判をどう捉えなおすかが重要となってくる。周知のように、サイードはオリエンタリズムについて、オリエントを科学、政治、社会や軍事などの領域で語り、かつこれに関して教育を施すことで、オリエントを管理・支配して、果てにはオリエントを再構成・創造するためのシステムと定義した[2)]。つまり、

オリエンタリズムは植民地支配と帝国主義を象徴的に支えると同時に、これを再生産する政治的な教義や言説であり、まさに「発話をめぐるパワー論」と理解できる[3)]。

それに対して上記のプロジェクトでは、ラテンアメリカの文脈から発話する主体が表象対象となるアジアやアフリカと同様に、植民地化や周辺化の歴史と現状をしばしば共有している、という点がまず強調される[4)]。ロペス・カルヴォによれば、ラテンアメリカから発せられるまなざしには、支配と服従、優越と劣等といった二項対立とは異なる対話のあり方を模索する姿勢が見られるという。要するに、表象対象を独占操作して自己の優越性を立証しようという従来のオリエンタリズム批判で指摘される欲望は、多くの場合存在しないのである。このように、西洋の周辺や他者とされた地域の主体が実践するより対等な対話に注目する研究の射程から「中心・周辺」という構造の解体が構想される[5)]。

このほか、文学研究者のA. ガスケ（Axel Gasquet）の仕事も興味深い。ガスケが19世紀から20世紀半ばごろにかけてのアルゼンチン文学を対象に、アジアとアフリカの表象を歴史的に検討している。ガスケによれば、国民国家を設計したイデオローグがヨーロッパ経由でオリエンタリズム的思考を受容したと指摘する。しかし、世紀転換期のジャーナリズムやモデルニスモ文学のなかで、ヨーロッパのオリエンタリズムと異なる視線を模索する動きが現れたことに注目すべきである。現に19世紀も末になると、官僚や作家、そして法律や社会科学の専門家などは、アフリカ北部やパレスチナ、そして中国や日本などの東アジアにまで旅することができるようになる。その際、植民地都市や近代化を経験しつつあった東アジアの諸地域に立ち会うことで、彼らは、ありとあらゆる近代性の側面（もしくはその欠如）を発見し、共和国の課題であった政治的、法制的、社会的な改革の参考として、はじめて共和国の読者に伝える役割を果たしたのである。

たとえば、医師と衛生官僚であったウイルデ（Eduardo Wilde 1844-1913）が日清戦争後の1897年に横浜、東京や名古屋などを訪れているが、彼は日本帝国の大都市のなかに、ヨーロッパや米国が提起する近代化とは異なった、オールタナティブなモデルを見たのである。本論でも述べるように、日本に特殊な近代化のあり方を見出す言説の類型は、日露戦争をはじめに、日本を取り上げるジャーナリズムのなかで後に繰り返されることになる。もっとも、アフリカ北部や中近東のイスラム圏、そしてある程度インドなどの南アジアに対しても、従来のオリエンタリズム的思考を再生産するという深刻な限界を指摘しなければならない。とはいえ、西欧のモデルと異なる近代化の可能性や、西欧と北米以外の地域の価値に対する評価自体は、ラテンアメリカの言論や思想界では前例のないものであった。

同じように、文学の分野では、オリエントの文芸や思想に題材を探求することは、従来のヨーロッパ中心主義から一定の独立性を獲得させ、かつ国民文学の建設という至上命題のもとで土着的なテーマがほとんど文学の必要条件とされるなかで画期的であった。こう

いった動向から「アルゼンチン文学」を国民的独自性の発揮とみなす文学史や、「ヨーロッパ・アルゼンチン」という両極的な構図の文化史を再構成することができるという[6)]。

以上のように、ラテンアメリカにおけるオリエント表象をめぐる主要な研究を紹介した。これを受けて、上記の研究状況のなかで榛葉の事例を位置づけてみよう。ロペス・カルヴォの提起では、介入的で支配的なオリエンタリズムに対して、ポストコロニアルな視座に立脚しつつ、周辺化された地域や疎外された個人と集団の相互作用に目を向ける必要があるという[7)]。それに対して、日本帝国の利害代弁者や移民社会の指導者の地位を築いた榛葉は周辺化された発話者ではなかったことが明らかである。ただし、榛葉が展開させた日本帝国の論理がアルゼンチンで醸成された帝国主義的な欲望といかに共鳴したかを本稿で論じることは、ラテンアメリカにおけるオリエント表象と植民地・帝国主義の関係というロペス・カルヴォの論点を問い直すものであると考える。日本で書くアルゼンチン出身者の筆者にとって、ラテンアメリカとアジアの対話の可能性という課題は、双方が結んだ共犯的関係の歴史の批判から始めなければならない。

一方、1930年代に日本の文化的価値を主張した榛葉の言説には、ガスケが指摘したように、ヨーロッパ的価値を相対化するための契機としてのオリエントという認識の土台があったことが本稿で明らかなはずである。ただし、日本を西洋のオールタナティブと評価する言説は、それが意識的であったか否かにかかわらず、あたかも日本の優位性と特殊性を立証するかのように、文化ナショナリズムや帝国主義の正当化に容易に流用された歴史があるのも事実だろう。したがって、本稿では、このような歴史を改めて問題化するところから出発したい。そのため、西洋へのオールタナティブとしてのオリエントを内面化した榛葉に焦点を当てて、彼がホスト社会に何を語りかけたかを検討する。外国人のまなざしを通して、「日本・日本人」の自己同一性を再生産しようとする姿勢が一部のマスメディアや研究で強化されるなかで、日本が非西洋の特権的な主体として想像された歴史の一角を考えていきたい。

本稿の構成

以上を受けて、本稿では次のような課題に取り込む。まず第１章では、榛葉の経歴を概観する。移民社会のなかで榛葉を位置付けると同時に、彼が言論活動に乗り出す経緯と活動の展開を整理し、その言説が公開された媒体や流通範囲を考察する。

第２章では、榛葉がアルゼンチンをどのように語ったかを論じる。榛葉は渡航して早くから日本民族・国家共同体の海外発展の前衛を担う指導者としての意識を培っていくが、同時にブエノスアイレスの上層市民の価値観や生活志向を内面化し、アルゼンチンの公定ナショナリズムをも合わせて抱えたのである。その結果として、榛葉はトランスナショナ

ルな思考を築いていった。そして、1930年代、日本帝国の危機と目された状況のなかで、出生国の論理を宣伝するとともに、アルゼンチン生まれの移民２世や広くホスト社会にも呼びかけ、「アルゼンチンの発展」へ向けて読者を鼓舞した。この議論を通して、榛葉が移住国の支配的言説を内面化した状況を確認し、これは言論活動の戦略全体のなかで、日本をめぐる発言と密接に連動していたと指摘したい。

そして、第３章では、1930年代半ばから40年にかけての榛葉の著作や講演録を分析して、彼が西洋、日本やオリエントについてどのように語ったかを検討する。榛葉は1934年に発表した『日本帝国の歴史』のなかで、「東西両文明を融合」しながら自律的に発展する「日本帝国」の近代を記述した。そして、日中戦争さなかの『日本の理想』（1938）や、「紀元二千六百年」の日本への旅を経た『日本における「家族国家」という不変理念について』（1941）などの講演を通して、榛葉は（英国と米国に代表された）西洋の「帝国主義」を激しく批判する一方、西洋の優位性を無化するため、新世界・旧世界という新たな構図を設定するにいたる。新世界の構想は、日本帝国の「東亜新秩序」の論理をただ受け持つのではなく、アルゼンチンの知識人や支配層が育んだ帝国主義的な欲望をも同時に盛込んでいた。このような言説を分析することで、ラテンアメリカにおいてオリエントを語る営みを問題化したい。

１．榛葉贇雄の経歴

１－１．生立ちとアルゼンチンへの渡航

榛葉は1884（明治17）年、佐賀県東松浦郡唐津町（現唐津市）に生まれた。榛葉家は唐津藩主、小笠原家に代々仕えた家柄である。さらに、贇雄の父親、峯吉が東松浦郡湊の小学校教員を経て湊村の村長にもなり、母親が湊村の庄屋を代々勤めた家柄の出自であった[8]ように、彼が地域社会のエリートの出自であったことが分かる。

唐津中学校に通っていた頃、榛葉が他家からの養子縁組を断ったため、親との不和が生じてしまい、ついに学費を絶たれてしまった。そこで、中退を余儀なくされ、榛葉はついに家出し、長崎に向かう[9]。おりしも1899（明治31）年、アルゼンチン海軍の練習艦・サルミエント号が初の遠洋練習航海の途中で長崎に寄港する頃と重なった。サルミエント号で「ボーイ」が募集されていると聞いた彼は、艦上で働くことを引き換えに乗艦を許され、1900年９月30日にブエノスアイレス港に到着する。

到着後は曲折を経て、練習艦乗組員の紹介で、日本の絹製品を輸入するアメリカ系商社の支店長であったヴァレ（Valle）のもとで働くことになる[10]。仕事のかたわら、榛葉は国立ブエノスアイレス高等学校、そしてブエノスアイレス法科大学で勉強することができた。その間、最初の日本アルゼンチン公使、大越成徳（ブラジル駐在公使と兼任）が1902年

10月24日に到着した際、榛葉は「甚だ稀なる在留邦人の代表として」案内役を務めた。外交官との交流がきっかけとなったのか、これ以降、榛葉は『国民新聞』に継続的に通信を寄せることになる。そこでは、アルゼンチンの経済的状況を報告し、さらには日露戦争の勃発後、移住地で日本に対する関心が高まるなかで移民や投資を故郷の『唐津新報』で呼びかけた。このように、日本移民が本格的にアルゼンチンに入る前、彼は日本帝国の代表者、そして南米における日本帝国の海外発展を担うという指導者意識を育てていった。

1908年、第一回笠戸丸移民はブラジルのサントス港に降りるが、労働や生活条件に不満を持った者がコーヒー農園を離脱し、アルゼンチンへ移動すると、ブエノスアイレスを中心に、日本移民が徐々に都市部に住み始めた。同じ頃、榛葉は独立して商社を営み、絹織物の輸入を中心に日本との貿易に携わっている。事業に専念するためか、卒業間際の大学を中退し、他方でラウラ・ハドソンというアルゼンチン女性と結婚した[11)]。大越の調停で榛葉は両親と和解して文通もするようになっていたが、そのおかげで故郷から資金を取り寄せることができた。ところが出だしから思うようにいかず、翌1909年には従業員に商店を託して、一時帰国した[12)]。

翌年、アルゼンチンに戻り、以降10年間はブエノスアイレスで支店を構える日本の商社に勤めている。1910年に長女ヴィオレタが生まれるが、1915年には夫と幼い娘を残して、ラウラが夭折してしまう。その６年後、1921年にソフィア・デリアという女性と再婚して、再び独立の商社で事業を手がける。デリアとの間に、息子２人、娘１人が後に生まれる。

アルゼンチンでは、ブラジルなどとは異なって、契約移民や官約移民が原則として導入されることはなかった。したがって、日本から入国するには、「自由労働者」として、または誰かの呼寄せによらなければならなかった。そのなかで、日本移民は、アルゼンチン北部や中央部ではサトウキビ農園で働き、ブエノスアイレスでは工場労働者や家庭使用人となった。1920年代になると、自営業への移行が始まった。日本移民は都市部で主としてカフェや洗濯屋を経営し、郊外や農村部では蔬菜や花卉の栽培に手がけた[13)]。

このように在亜移民社会が形成されていくなかで、榛葉は先輩格の一人としての立場を獲得していく。榛葉は多くの困難や非難に直面しながら、軌道に乗る在亜日本人会の人事部主任を務めて、1924年には副会長、そして1927年には会長に選ばれる。花卉栽培の指導者であった賀集九平が榛葉について「氏の奮闘史こそ、吾等後学の活ける方針であるといってよい」と評価したように、社会的上昇を夢見る青年移民にとって、榛葉は模範すべき先達であったと想像できる（賀集1954：29）。

１－２．言論活動の展開

1931年に勃発する「満州事変」とその後の日本政府の対外行動が榛葉に大きな転換を迫っ

ている。アルゼンチンの主要な新聞が日本政府を批判するなかで、古参移民や領事館関係者は排斥運動の可能性を恐れた。古参移民は日本に対する「誤解」を解き、移民社会の立場を安定させる目的で新聞に投稿を始めるが、そのなかで榛葉の活動が際立った。彼は権威ある『ラ・ナシオン』や人気を博した夕刊『ラ・ラソン』などで発言し、1933年末には『満州事件の真相』という題で記事を単行本にまとめた。さらに、ブエノスアイレスで発行された日本語新聞『亜爾然丁時報』で、スペイン語部が1934年12月８日に創設されると、榛葉はその編集長に選ばれる。アルゼンチン政府の対日宣戦に伴って発行禁止となる1945年３月まで、これが中心的な発信の媒体となる。

その他、1933年10月に日亜文化協会という組織が作られている。同協会には、名誉会長に選ばれた元海軍大臣のドメック・ガルシアをはじめとして、海軍高級士官やブエノスアイレス社交界や学会の名士、そして日本移民社会の指導者が名を連ねていた。榛葉が実質的に中心となったこの組織では、数多くの講演会や日本語・日本文学の講座が開催された。その際の原稿が小冊子にまとめられ、会員を中心に配られた。日亜文化協会が独立した機関誌を持たなかったため、『亜爾然丁時報』スペイン語部に協会主催の行事の予告や講演内容が連載された。もっとも、7000人を超えなかった1930年代のアルゼンチン日本移民社会の新聞は発行部数が少なく、かつ購読制であったため、大きな限界があっただろう。しかし、『亜爾然丁時報』が各地の主要な新聞に送られたことで、この限界をある程度克服することができたように見受けられる。現に、首都の新聞が協会主催の講演を報道し、榛葉の著作をほとんど欠かさずに紹介したことで、榛葉はその活動を広く宣伝することができたはずである。

そして1934年末、榛葉が国際文化振興会の連絡員に選ばれると、その言論活動が日本政府の対外宣伝政策と交錯するようになる。国際文化振興会とは、1934年４月に外務省文化事業部の管轄指導のもとで創立された財団法人であり、日本最初の本格的な国際文化交流事業機関とされる。創立当時から戦時期にかけて、外務官僚や国際派華族、国際連盟関係者が中心を担った[14]。そこで、米国歴史研究者の中屋健弐が振興会の委嘱を受けて、今後の事業に向けての調査と交渉のため、1934年12月上旬にブエノスアイレスを訪れ、榛葉に迎えられた。これがきっかけで、榛葉が連絡員になったのである[15]。

連絡員には「外国に於ける文化事業団体及其活動に関しての調査」[16]が求められていた。だが実際、海外連絡員との関係は緩く、資金面で大きく制限されていた振興会からの援助がなかった代わりに、榛葉が振興会の権威、資料提供や人脈を活かして、日亜文化協会の活動を発展させることができた。現に、1935年には堀口久万一、1939年に田中耕太郎の「文化使節」を受け入れ、1936年９月にはブエノスアイレスで開催された第14回国際ペンクラブ大会を機に、島崎藤村と有島生馬の案内と通訳を担当した。

しかし、日米英戦争の勃発とともに日亜文化協会の活動が全面的に中止され、スペイン語部も著しく縮小を迫られる。その挙句に1945年３月27日にアルゼンチン政府が対日独宣戦を布告すると、榛葉は諜報活動の容疑で逮捕される。太平洋戦争下、『報知新聞』（1942年の新聞統合以降は読売新聞に合併され『読売報知』と改題）の通信員を勤めた[17]榛葉が、日本の中立国や同盟国に駐在した公使館付武官や民間企業駐在員と同様に、軍部に情報を提供したためと思われる。こういった立場の者は、ロイターやUP通信社などの英米系通信社発の記事や、*Life*や*TIME*などの一般雑誌を「敵性情報」として軍部に報告したことが知られている[18]。

しかし、この一時的な挫折にもかかわらず、日本語新聞の復活に伴って、榛葉は再び移民社会論壇の中心に立つことになる。1948年に沖縄県出身者のグループが『らぷらた報知』を創刊すると、榛葉はここで論説を手がけて、1954年９月27日に世を去る直前まで筆を執っている。榛葉の晩年をめぐって不明な点が多いが、彼の死去が主要な新聞で報道されたことから、最後まで一定の知名度を保てていたことは間違いないだろう。

２．アルゼンチンを語る日本移民

２－１．アルゼンチンを愛する日本人：榛葉のトランスナショナリズム

本章では、榛葉が日本民族・国家共同体の海外発展の前衛という意識を育てつつ、ホスト社会の支配的言説を内面化したうえで、アルゼンチンをどのように語ったのか、ホスト社会に対してどういった姿勢を取ったかを検討する。

前述したように、1900年代の榛葉は『唐津新報』で移住を呼びかけた。しかし、1920年代になると、彼は移民社会のメディアで「亜国が白人主義国である」ことを同胞に説いて、大掛かりな移住構想を断念している[19]。榛葉が青年期を送ったアルゼンチンでは、近代的共和国にふさわしい国民をヨーロッパ移民から作り上げ、南米にヨーロッパ文明を移植しようと主張した、19世紀のイデオローグの構想が揺るぎない権威を持っていた。現に、1857年から1914年にかけて、およそ460万人の移住者がアルゼンチンに到着したと推定されるが[20]、実は奨励政策がヨーロッパ移民に限られ、その他は制度的な支援から排除されていた。そこで、榛葉はアジア移民に消極的な国での限界をやがて自覚し、ホスト社会を相手にする貿易業者として小規模の日本移民の地位向上に貢献する構えを見せる。先駆者を取材する『亜爾然丁時報』のインタビューで榛葉は次のように語っている。

> 帰化はして居ません。一度手続きをした事がありますが止めました。私は永久に日本人であり、同時に心から亜国を愛します。在亜外人が亜国を悪く言へば亜国のために大に弁護する程であります。亜国は私の骨を埋める所です。日本に帰る考は更に

ありません。（中略）二十四年後の今日、既に三千有余の同胞と各種の商店と公館とを有するに至った事を洵に嬉しく思ひます。お互に一層民族発展のために努力しませう[21]。

日本帝国への忠誠とアルゼンチンへの敬愛を融和させることは、定住志向の一世、とりわけ事業である程度成功した者にとって、移民社会の理想像であったと指摘されている[22]が、榛葉の発言もこれと軌を一にするものだろう。移民研究では、このような折衷主義をトランスナショナリズムと呼ぶ。移民の生活のなかでは、複数の場所や境界横断的な社会ネットワークで同時的にあるポジションを主張したり、または複合的で流動的なアイデンティティを駆使したりする傾向が見受けられる。こういったアイデンティティの構築は、移民が関わる複数の文脈における支配的なイデオロギーや社会的・人種的秩序に対抗するとともに、これらと協調して既存の枠内に適応するための生活戦略として考えることができる[23]。

榛葉の言論活動全般にわたって、トランスナショナルな目的意識が一貫して、きわめて戦略的に公言されている。とりわけ、彼が編集長を勤めた『亜爾然丁時報』スペイン語部においてこれが顕著である。スペイン語部の創設に当って、日本語版の社説では、「祖国は重大危機に直面し愈々三五・六年の危険期も正に迫らんとする此際」、「嘗て満州事変勃発当時に於けるが如き認識不足による大なる誤解を招來せざるやう」「我日本帝国の真姿並に我等日本人に対する誤らざる認識」を促す、という目的が唱えられた[24]。榛葉は初のスペイン語社説において、この目的を引受けたのみならず、「日本の友であるアルゼンチン国民」に語りかけたい、という課題をさらに付け加えている。このように、榛葉は日本帝国の内外政治、経済や軍事行動、そして文芸や慣習などを取り上げただけではなく、２世を主な対象として、アルゼンチン国民文学の代表的な作品の抜粋や歴史を彩る英雄の美談も掲載した。

さらに、１世移民の父母が体現する忠君愛国という「日本的」美徳を模範として、アルゼンチンの良き国民になるよう促した訓話の類も見られた。そもそも、１世移民の間、立派なアルゼンチン国民を育てることで、ホスト社会の発展に貢献できるという認識が少なくとも定住を思考する層には一般的であった。それは、「日本の「民族」的発展から得られる知識をアルゼンチンに還元することによって、矛盾なく忠・愛国心の宥和」を果たす構想であった[25]。このように、スペイン語部が移民のトランスナショナルな発展を実践するメディアとして構想されたが、以下に論じるように、榛葉の宣伝活動の構想全体のなかで、多分に戦略的であったと考えられる。

２－２．アルゼンチン国民への激励

次に、アルゼンチンの発展を呼びかける榛葉が、幼い２世とともに「アルゼンチンの青年」にも直接訴えかけたことに注目したい。その際、彼はホセ・インヘニエロス（José Ingenieros 1877 - 1925）という思想家に多く依拠した[26]。現に、インヘニエロスが「世俗的訓話」と銘打って、ラテンアメリカの青年に新たな価値観の創造を呼びかけた著作がスペイン語部の第２号から連載されている[27]。榛葉がインヘニエロスを「青年たちに一生を捧げた傑出した愛国主義者」と評価し、栄光ある共和国の将来を築くべきアルゼンチン青年に語りかける際に好んで引用した[28]。

インヘニエロスは1915年に『哲学雑誌』を組織して、「アルゼンチン人」が統一された国民として構築すべき思想を定義することにこだわり続けた[29]。榛葉はインヘニエロスの思想のこのような側面に共鳴したように思われる。「アルゼンチンの青年男女と協力して、共にこの祖国を偉大なる国家（ナシオン）に成長させたい」との願望を表明して、彼は以下のように述べた。

> なぜなら、ラ・プラタ川を受けるこの岸で文明世界の模範になる新たな国民が生まれるであろうことを確信しているからだ。運命が我々に授けた恵まれた要素と条件は、世界のどの国でも他に見ることができない[30]。

引用では、世界文明のなかで特異な位置にあるとされるアルゼンチン国民の誕生が予言されている。そもそも、インヘニエロスがこのような思想を構築したのは、経済成長や人口増長を経験する共和国の輝かしい未来像が共通の認識であった1900年代のことである[31]。その際、「アルゼンチンがこのように発展し続ければ、世紀末には70千万の人口を擁し、ラテン系民族によるアングロサクソン系民族への対抗の要になるだろう」という展望がヨーロッパの新聞で現れ、これは大西洋を越えて真剣に受けとめられた[32]。ヨーロッパ、とりわけ英国向けの農牧産物の供給市場として共和国の経済構造が設計されつつあった時期、アルゼンチンが国際社会で主要な位置を約束されていることは、支配層の共通認識であった。

インヘニエロスは1908年にこの信念に「社会学」的な根拠を与えようとして『アルゼンチンの社会学』を発表した。広く読まれたこの著作において、彼はアルゼンチン国民の形成過程を科学的に解明する目標を立てるが、そこでは「広大な面積、国土の豊穣さ、人口の特徴や気候といった条件が、（アルゼンチンを）南米大陸の温暖地帯に来るべきネオ・ラテン民族の発展の中心地になる運命をすでに与えている」という状況認識が出発点になっていた[33]。なお、1920年代になると、インヘニエロスは反米・反帝国主義を主張し始

め、ラテンアメリカの連帯を重視しながら、北米合衆国の膨張を食い止めるべき対抗勢力として、アルゼンチンを国際的に位置付けなおす方向へ思考を転換させ始めた。

榛葉は1900年代を通して首都で教育を受けたが、この時期の思想的状況の影響が彼の言論にうかがえる。実際、榛葉はブエノスアイレス法科大学で著名な法学者、また歴史学者や政治家のセバショス（Estanislao Zeballos 1854-1923）から教えを受けているが、セバショスも共和国に南米大陸の盟主という運命を見ていた。セバショスは、共和国の地位が軍備拡張や領土の膨張によって裏付けられるべきだとまで論じる人物であった[34]。

上記のように、榛葉はホスト社会の対日世論を左右する言論活動に取り組む際、アルゼンチンの国民性を称讃し、移民２世も含まれる「アルゼンチン人」と連携する戦略を選択した。したがって、榛葉の言論は、アルゼンチンにおける支配的な言説の受容という戦略的な立場表明を前提にしていたといえる。次章で議論するように、アルゼンチンと日本双方に立場を主張しようとする榛葉のトランスナショナルな戦略は、彼が語る西洋とオリエント、そしてこの二項対立を脱中心化しようとする構想を立てる際に、常に影を潜めていた。

３．西洋・オリエント・新世界

３－１．東西文明を融合する帝国の「近代的発展」：特殊性と普遍性の欲望

本章では、1930年代半ばから40年代にかけて、日本帝国の宣伝に専念した榛葉が西洋やオリエント、そして両者の二項対立を超克しようとした新世界という心象地理を、いかに論じたかを考察する。これを通して、ラテンアメリカでオリエントを語ることの意味と問題を考えたい。

1934年に榛葉は『日本帝国の歴史』[35]を刊行した。彼は、新聞メディアで日本帝国の対外政策の正当性を主張し続けると同時に、その正当性の裏づけとなる文化的優位性を宣伝する戦略をとる。本著では、まず地理や政治制度を概観し、「日本の発展」を論じる導入部分に続いて、「歴史的素描」、「近代日本」、「国民的特徴」、「日本の経済力」、「植民地」という章が展開される。最後には、満州事変や日米貿易摩擦など、アルゼンチンや欧米のメディアで批判を浴びる日本政府の立場を弁明する「付録」をつけた。

本著の原題は「日出る処の帝国　その偉大な近代的発展」と訳せるが、日本の文明度を立証すべく榛葉は相当の紙幅を割いている。現代日本の政治、経済、技術、教育や文化の発達度は、欧米諸国のそれとまったく同等であることが繰り返し強調されている。要するに、非西洋・非白人国である日本がいち早く文明化したという評価は、その歴史や「国民性」を論じる前提とされている。

日露戦争は日本の近代的発展を語るうえでとりわけ重視された。日露戦争を機に、欧米

諸国の有色人種に対する優越性や偏見が反駁されたと榛葉は主張した。その際、かつて相反すると思われた西洋と東洋の両文明を実際に融合調和できることを、日本が事実をもって世界に証明した、ということである[36]。その結果、東西両文明が二項対立的に捉えられるという「伝統的な頑迷さ」を、近代日本がすでに克服していたと主張したのである。

実際、日露戦争当時、ブエノスアイレスの主要な新聞が「自国の伝統を遵守しながら、他方でロシア以上に西洋文明のよい面を取り入れて近代化した」日本に焦点を当てた。その際、「白人優位の社会進化論は修正を余儀なく」された[37]とする報道を、榛葉は確実に目にしただろう。すでに見た通り、1880年代以降、アジアとアフリカを訪れるラテンアメリカの旅行者が増え、それまでに英語やフランス語のテキストを媒介に受容されたこれらの地域をめぐって、従来の枠組と距離を置いたまなざしが模索されていく。この文脈で、新興共和国にとってのオールタナティブな近代の模範として、大日本帝国が注目された[38]。それから30年後、これらの言説を掘り起こすかのように、榛葉は西洋中心の一面的な近代を相対化した日本の近代的発展を「人類史的意義」の中で位置づけようとしている。

その際、榛葉は岡倉天心の*The Awakening of Japan*を参照しつつ、日本の近代的発展の基盤があくまで日本的固有性の保持に求められると主張した。「数世紀にわたる孤立主義政策」のもとで、日本は仏教などのアジア大陸文化の影響を克服して、かつ「形質や心情において完全なる固有の民族を形成」したという。要するに、古代のアジア大陸文明や近代西洋文明の内面化にもかかわらず、日本の「精神的な独立性」が全うされた、ということである。榛葉によれば、異質性の導入は選別、改良と同化の過程であり、したがって日本の近代化はあくまで自律的な発展の延長線上にあったという[39]。

以上のように、日本帝国の近代的発展を東西両文明の融合過程として描く榛葉が、西洋の普遍性をさらに超克した特権的な主体として日本を再構成しようとしたことを確認した。榛葉はアルゼンチンのホスト社会に日本帝国の対外行動の正当性と、その裏づけとされる文化的優位性を宣伝するに当たって、西洋近代の普遍的価値と、そのアンチテーゼとしての日本的特殊性を合わせて動員したが、このようなオリエンタリズム的な二項対立を利用しつつも、他方でその相対化を準備していた。以下で見るように、日中戦争が泥沼化し、英米との対立も深刻になっていくなかで、榛葉は一連の講演で西洋・東洋の枠組みを塗りつぶすかのように「新世界・旧世界」という、もうひとつの心象地理を提起していった。

３－２．西洋を超克する「日本の理想」：東西文明の転倒

国際文化振興会の連絡員という肩書きで、榛葉は『日本の理想』[40]と銘打たれた「日本文化講座」を、1938年10月から11月にかけて４回にわたってブエノスアイレス文科大学で行なった。それぞれの題名は「日本の文化的発展」、「日本の近代的発展」、「日本民族の

特徴」、そして「日本の理想」であった。この際、国際文化振興会が発行する資料を参照することで、彼は一層洗練された言語で「日本」を語ることができたわけだが[41]、そこに現れる「日本人」は、繊細で静寂を愛し、新聞が批判した中国大陸での残虐とはあまりにも対照的であった。

「日本の理想」を語る榛葉は、やはり岡倉天心の影響を覗かせている。1936年の第14回国際ペンクラブ大会を機に訪れた島崎藤村の助言を受けて、日亜文化協会が1938年に『茶の本』のスペイン語訳を出版することになった。そもそも『茶の本』とは、日露戦争下、ボストン美術館の招聘で米国にいた天心が日本に有利な方向に世論を向かわせる企図で書いたと指摘される[42]。同じように、榛葉は天心から多くを借りて、戦争する日本にとって真の理想とは物質的な征服ではなく、むしろ超俗的で審美的な世界であると主張した。

榛葉の第一回講演は、現在の西洋が民主主義の終焉を迎えつつある一方、オリエントは「自由主義的信条」を実現させる気運にあふれている、という挑発的な断定で始まる[43]。続いて、彼は東西両文明がいつしか接近しはじめ、人類は最終的に両者を融合調和する道をたどっていると述べた。現に、ヨーロッパが知らずしらずのうちにオリエントに視線を向け始めたように、日本は「オリエントの国でありながら、西洋文明の擁護者」の地位をすでに獲得したという。

ここでも榛葉は、ヨーロッパに代表される西洋と、日本に代表される東洋というオリエンタリズム的な緊張関係を踏襲する一方で、東西両文明を融和させたという日本という特権的な主体を起点にオリエンタリズム的二項対立を脱中心化するレトリックを展開する。第１回講演を終えるとき、榛葉は西洋・オリエントの緊張関係に発話の場であるアルゼンチンを組込むことで、新しい心象地理を設定し、「この大陸の前衛を行き、旧世界にとっての希望であるアルゼンチンの若き学生」に訴えかけ、「オリエント、とりわけ日本文明」を研究することの意義を強調した。というのは、「新世界に与えられた使命は、オリエント文明殊に日本文明を理解せずには満足に完遂されない」からだという。榛葉は、文明史的な展開のなかで東西両文明を調和させた日本と、ラテンアメリカの前衛たるアルゼンチンとを密接に結びつけ、西洋・オリエントの二分法では定義しきれない「新世界」なる心象地理を登場させた。ここに至って、アルゼンチンで日本帝国の理想を語る意義を模索するなかで、榛葉は西洋・オリエントの対立に亀裂を入れたことに注目しなければならない。

とはいえ、新世界の確立は西洋との対決を経なければならない側面を有していた。1938年11月８日、「日本の理想」と題された最終講演が行なわれた。周知のように、日本政府は11月３日にいわゆる第二次近衛声名を発して、「東亜新秩序建設」を宣言した。その全文が11月５日の『亜爾然丁時報』で掲載され、移民社会はいち早くその内容を知ることができた。そして、あたかも移住地で「新秩序」の論理を引受けるかのように、榛葉が最

終講演で西洋を強い語気で批判し、来るべき「理想」を語ったのである。

榛葉は、ヨーロッパ列強のアジアに対する植民地支配と圧迫、そして西洋近代の理念として持ち上げられる自由や平等に相反する非白人への差別を批判していく。まず、ウィルソン主義に強く共鳴した日本が国際連盟の席で「古今掲げてきた価値に基づく普遍的な提案」、すなわち人種差別撤廃を提言したことを引き合いに出した。しかし、反対されると、日本が「国際連盟の欺瞞」と「西洋の偽善」を覚ってしまい、「数千万の抑圧された東洋人を解放する偉大なる事業」を用意し始めた。そして、その実現のためには、列強が仕掛けるであろう戦争をも覚悟している、と述べたのである[44]。

「日本人」の道義的無欠性を自明視する榛葉にとって、帝国が被植民者やマイノリティーに差別と不正を押し付けたと知る術はなかっただろう。榛葉の言葉は欺瞞的であったに違いないが、それでも彼がウィルソン主義に仮託して、西洋の普遍性の欠落と敗北を立証したつもりでいたことは間違いない。榛葉は「すべての文明国家が人種を問わず人類の権利平等を正式的に承認」するように提案した日本を普遍的な主体として設定し、人種差別撤廃に反対した国際社会の普遍性に疑問を投げかけた。そして、このように没落する「旧世界」に代わって、新世界という新しい普遍者を登場させていった。しかし、「普遍性は、なんらかの個別性に実体化される――そしてそれを覆す――ときにのみ存在する」ことを考慮すれば[45]、榛葉は日本帝国の覇権を正当化する欲望を合理化していたに過ぎなかった[46]。

上記のように、戦時下の「日本の理想」を語る榛葉は、日本帝国が普遍者の資格をもってアジアで西洋近代を超克する展開を示した。日本民族は「西洋が独占している自己の理念を、何らの差別、叱責や権威を行使することなく、全世界の共有財産に供すべく実践するという理想、いな宿命を有している」ため、かつて日本が中国と西洋の文明を導入したように、今度は西洋が東洋から、そして中国が日本から学ばなければならない[47]、と述べた。これは講演の結論といっていい。ただし、発話の場であるアルゼンチンも、新世界の使命を全うするため日本を研究しなければならないという主張は、展開されないまま講演の終わりを迎えたことを付言しておく必要がある。そこで、次に論じるように、日本帝国が米国や英国に代表された西洋との対立を深めていく際、ホスト社会で榛葉の立場が危うくなるに連れて、発話する意義を模索するなかで西洋・オリエントの二項対立を動揺させる新世界の論理がさらに展開されていった。

３－３．アルゼンチンで帝国の「不変理念」を語る：アジアとアメリカを結ぶ新世界

1941年６月、榛葉は「日本における「家族国家」という不変理念について」と題する講演を行った。1940年、国際文化振興会に招聘され、彼は「紀元二千六百年」の記念行事に参加するべく20年ぶりの帰国を果たす。神話的原初を現在に幻視して沸きかえる日本

帝国に巡礼して、その感慨を日亜文化協会主催の最後の講演となったこの機会に披露した。

榛葉は旅行で再確認した帝国の経済的実力や国民生活の活気、そして社会的規律への尊重を語り、この状況を天皇への忠誠に帰結させ、「家族国家という不変理念」なるものを導入する。榛葉は海外同胞東京大会に参加したが、その際「我が帝国は八紘一宇の無窮に発展すべき運命を担い、人類の為に真の正義、真の幸福を齎すべき皇道の昂揚宣布に勇往邁進して居る」[48]という類の、いわば国体言説に囲まれた。彼はアルゼンチンに戻ってから、ホスト社会に向けて国体の理念を翻訳し、それこそ「世界人類の行くべき道」[49]を示しているとして、普遍性を持たせようとしたのである。

しかし、戻ってみれば、日本の「民族的固有性」を公言することが果たして適切かどうかを悩ませるほどの「騒然たる状況」に出くわした、と榛葉は告白する。一方で、榛葉は、教皇が「レールム・ノヴァールム」[50]回勅公布50周年を機に述べた言葉に接して、ようやく決意がついたと語っている。というのは、回勅に表現される「人類が掲げる社会的問題を解決するための教説と、日本の伝統的理念である「八紘一宇」とが多くの点で一致している」ことに気づかされたからである。

荒唐無稽ではあるが、聴衆の誰もが正面から否定し得ない教皇の権威でも仰がなければ帝国を公的に弁明することがもはや許されない状況下にあったと推察できるだろう。すでに見たように、榛葉は帝国を宣伝するとき、日本的特殊性を普遍性に翻訳してきたのである。だが太平洋戦争前夜にもなると、対日世論の悪化に伴い、自閉的な特殊性を普遍主義的な言語で他者に語ることは一層困難になっていたはずである。そこで、回勅への言及があったと思われる。その他でも、「皇道」なるものを取り上げ、その「道」が語源的に「仁、正義、真理」を意味するとして、これは「統一に導く徳、有限を無限に結びつく連鎖」を表現するもので、いわば「イエスクリストが道や、命、真理について教えられたところと同義」のもの、「あるいはプラトンのロゴス」に等しいと述べた[51]。戦争を正当化する言説の昂揚に翻弄される榛葉の言説は、ホスト社会に対する翻訳の過程で奇怪さを極めていくのである。

ただし、その翻訳の作業は、発話の場であるアルゼンチンの支配的な言説との接続を試みることであり続けたことを忘れてはならない。「アルゼンチンで日本の国民性を研究する」ことの意義を、榛葉は以下のように述べている。

> そうすることで、両国間の文化的接近という公平無私な事業に協力できる。アルゼンチンと日本が20世紀に傑出した２つの国民（ナシオン）・国家である。両者ともが偏見を知らず、高潔な人道主義の理想を掲げて、それぞれの活動領域で重大なる使命を帯びている。現在、我々が残念ながら悲劇的な瞬間に立ち会っているが、強烈な破壊が過ぎ去った

後の新時代において誕生すべき文明の発展に向けて、両者が独自の貢献を果たすように等しく運命づけられているのである[52]。

このように、若返ったアジアに台頭する帝国と、アメリカ大陸で文明の前衛を行く共和国とが、文明史的な展開の交差点で邂逅して、新たな普遍性をまといながら新世界を構成することになる。日本帝国がアジアの盟主を名乗り、東亜新秩序の建設を宣言したことに呼応するかのように、榛葉はラテンアメリカの覇者になるアルゼンチンの構想を打出した。これを受けて榛葉は「家族国家・国体」などの戦時イデオロギーを、あたかもユートピアのように語っていく。ただし、こういった新世界の構想を前提にすることで、それはあくまで20世紀の国際舞台へ飛躍すべき共和国にとっての有意義な模範と位置づけることができた。

『亜爾然丁時報』スペイン語部でも、「アルゼンチンの理念は、建国以来現在にいたるまで日本が維持し続けたもの、すなわち普遍的な原理に基づく世界平和」であると述べ、普遍的価値を媒体に両者を結びつけようとした。榛葉はここで外務大臣サヴェドラ・ラマスのノーベル平和賞受賞を取り上げ[53]、日本と連合国との戦争が展望されるなか、共和国の「調和と友好の伝統的な対外政治」に期待を寄せている[54]。国民国家の物語が持つ特殊性を、大陸を覆うべき普遍的な理念に翻訳する作業のなかで、榛葉は日亜両国を特権的な普遍者に仕立て上げたのである。

同時に、普遍性を剥奪された旧世界が新世界を補完する他者として再構成される。榛葉は、日米開戦の前夜、「かつての権威の衰微に直面する大英帝国は、同胞である合衆国の絶えざる協力を得て、ともに自己のオリエント支配を守っている」と弾劾した。このように、新大陸に位置しながら、米国を文明史の展開に逆行する旧世界の勢力として表象することによって、自由・正義や平等を体現する日本とアルゼンチンを際立たせることが可能となった。

上記のような物言いはいかに独善的であったとしても、アルゼンチン支配層の自国の将来に対するあるイメージを想起させるのに十分であった。実際、パンパ地方の天恵を特別視する超歴史的な環境決定論や、文明を携えると思われたヨーロッパ移民を基盤にする「白人国」という人種決定論が1900年代以来強い影響力を発揮していた。これらに支えられ、アルゼンチン版「明白なる運命」とでもいうべき論理が言論界や学界で広がった[55]。榛葉が好んで引用したインヘニエロスも例に漏れていない。インヘニエロスは、「広大な面積、国土の豊穣さ、人口の特徴や気候といった条件が、（アルゼンチンを）南米大陸の温暖地帯に来るべきネオ・ラテン民族の発展の中心地になる運命をすでに与えている」という展望を、あたかも科学的な予測として提起した[56]。そして、このようなイメージ群を熟知し

た榛葉の言論活動のなかで、帝国の誇大妄想と共和国の自惚れが共鳴したのである。

３－４．榛葉の晩年：挫折と信念の間

この講演から数ヵ月後、榛葉はアルゼンチンで太平洋戦争の開戦を知る。1939年のヨーロッパでの戦争勃発と同様にアルゼンチン政府は局外中立を採用するが、1880年代以来のイギリスとの政治や経済での密接な関係を重視することは、従来の支配層にとって自然であった[57]。主要な政党やこれらを基盤にする政治運動も親連合国・反枢軸国を掲げた。また、榛葉が絶えず意識した主要な新聞も、連合国を支持することになる。それでも「未来の強国アルゼンチン」[58]や「アルゼンチンの偉大さ」[59]という論説を書き続けた榛葉の言葉は、空虚に響いただろう。『亜爾然丁時報』が閉鎖されるまで、敵の「帝国主義」を暴く傍ら[60]、敵国の南方から「米州（アメリカ）の新精神を吸収して目覚しい発展を遂げてきた高潔な国民」の美徳を頑なに称え続けた。

戦争の敗北を知った後の榛葉に目を転じると、彼は戦争を合理化する論理であった「理想」を最後まで諦めることがなかったようである。『らぷらた報知』で再び筆を執る彼は、戦後の国際秩序のなかで日本の優位性を再定義するため、いくつかの修正を試みた。「はるかな帝国に対して昔も今も深い好意を持ち続けるアルゼンチンの友」に日本の理想を語るというそれまでの生き方を続けるため、彼にとって日本はどうしても「世界に比類のない立派な精神国家」でなければならなかっただろう[61]。したがって、占領下の改革が「急変したものではなくて既往この気運が胚芽してゐた結果」と主張し、「二十世紀の日本民主化はすなわちデモクラシイの日本化であって、丁度仏教の伝来、支那文化の伝来の播入時代を想到せしめるものである」とするなど、最後までその「信念」を、少なくとも表向きには崩すことはなかった[62]。ペロン政権（Juan Domingo Perón 大統領在職 1946–1955）が労働者階級に直接語りかけることで「新アルゼンチン」の再建国を唱え、他方で「平和国家」の論理で日本が国際社会への復帰を図るなか、榛葉は両国の普遍化への欲望を汲み上げる活路を、再び得ることになった。これは「永久に日本人であり、同時に心から亜国を愛する」榛葉のトランスナショナルな意識の到達点であり、同時にその限界であった[63]。

ただし、榛葉のこの言葉は、長女ヴィオレタ・シンヤが語った父の晩年や、筆者が榛葉の子孫に聞いた内容と大きく矛盾する模様である。最後まで一緒にいた長女・ヴィオレタ・シンヤによれば、父親は日本の降伏とその理想の挫折を受容れることができず、立ち直ることができなかったという。「日本が屈服した」ことを目にすることの苦しみや、「武士道精神の挫折」が彼の死を早めた、と彼女は語った[64]。ただし、このような心境は晩年の記述からまるで想像できないため、この矛盾は未解決の課題であるといわざるを得ない。

以上のように、1930年代から40年代にかけての榛葉の言論活動を検討した。民族・国家共同体の海外発展を担う意識を持った榛葉は、「祖国の危機」を前に、帝国の論理をホスト社会に承認させることを自らの使命とした。榛葉は西洋・オリエントという二項対立的な心象地理に依拠しつつ、同時にこれを動揺させることで普遍性と特殊性を動員して、帝国の優位性を訴えた。そこで、米国と英国に代表される西洋との対立が決定的になるのにつれて、帝国と共和国を特権的に結びつける新世界の出現という文明史を想像した。そうすることで、アルゼンチン共和国の知識人や言論界のある部分が醸成した帝国主義的な欲望との回路を見出そうとした。

おわりに：更なる考察のため

本稿では、日本とアルゼンチンを横断したひとりの移民の言論活動を契機に、ラテンアメリカからオリエントを語る問題の一例を検討した。榛葉の言論活動では、すでに触れた近年の研究が提起しているように、西洋・オリエントという枠組を脱中心化する言説のあり方が、確かに構想されていたことを確認した。もっとも、榛葉の目的意識と、ラテンアメリカからアジアやアフリカを語り、これらの地域に背景を持つ人々と連携することの可能性を強調する文化的実践や研究との間では、明らかな溝が横たわっているのは間違いない。しかし、看過することのできない側面も同時にある。というのは、榛葉がヨーロッパの帝国主義を批判し、アジアの開放を叫び、さらにアジアとラテンアメリカの連携を基点に西洋・オリエントの構造を掻き乱したことは、少なくとも理論構造上、ラテンアメリカにおけるオリエント表象の近年の研究の提起と一致していたからである。無論、それは結局のところ、日本とアルゼンチンの帝国主義的な欲望を汲み上げながら、「普遍主義と特殊主義の共犯関係」[65]のなかで帝国の戦争を正当化する目的を持っていたことは疑いようがない。

しかし、政治的ポジションの違いにもかかわらず、榛葉が西洋の「周辺」から非西洋を想像することの可能性と威力を的確に捉え、その核心に迫ったからこそ、アジアとラテンアメリカを参照しつつ発言する者にとってこの歴史を深刻に考えなければならない課題を提起したことは間違いない。榛葉という日本移民がアルゼンチンで語った西洋とオリエントを通して、ラテンアメリカにおけるオリエント表象を問うことは、「西洋・オリエント」と「中心・周辺」の拘束から開放された、脱中心化された主体同士の対話の可能性を暗示しつつ、しかしこの可能性が見事に裏切られてしまう過程を際立たせることになる。今後の課題として、脱中心化や解放の可能性がいかに想像され、どのような系譜と結果をたどったかを、南北アメリカ全体に射程を広げつつ、その歴史を再考していきたい。

注

1）ラテンアメリカの文脈でオリエントを表象することの問題に入る前に、本稿で用いる「オリエント」の意味を定義しなければならないだろう。本稿で用いるオリエントとは、西洋という対義語との差異化、根本的な区別や緊張関係のなかにのみ存在する心象地理であり、具体的な地域と同一視することはできない。18世紀以降、オリエントが「中国から地中海」（Said 2003：42）を含意する地理的、地政学的や歴史的概念として見られるが、このきわめて広大な範囲に含まれる諸社会の多様性から、オリエントという概念の恣意性が照らされる。つまるところ、オリエントも西洋もあくまで「仮想された同一性」（酒井2015：38）に過ぎない。

2）Said 2003：３

3）太田 1999：102

4）López-Calvo 2010：１

5）López-Calvo 2010：６

6）Gasquet 2007：293-296

7）López-Calvo 2010：５

8）佐藤 2009

9）佐藤 2009：４

10）サンチス・ムニョス 1998：１

11）彼女はイギリス系の親からアルゼンチンで生まれた博物学者・小説家ウイリアム・ハドソン（William Henry Hudson）の姪に当たる。

12）R.S.生「先駆の人々(1)　榛葉贇雄氏　1902年来亜　現在亜日本人会副会長」、『亜爾然丁時報』第128号、1927年１月８日

13）日本外務省やアルゼンチン国勢調査の資料を合わせて検討した比嘉マルセーロによれば、アルゼンチンの日本国籍者は1920年には2027人を数え、1930年には4029人、そして1940年には7095人であったという（Higa 1995：490）。

14）芝崎 1999：i

15）「榛葉氏国際文化振興会の連絡員に任命さる」『亜爾然丁時報』第548号、1934年12月15日

16）国際文化振興会 1935：39-40

17）日本人アルゼンティン移住史編纂委員会 1971：137

18）小谷 2008：48-49

19）GYS生「外国移民に対する亜国人の意向」在亜日本人会　編『在亜日本人』第42号、1924年８月、11ページ

20）Devoto 2003：49

21）RY生「先駆の人々　榛葉贇雄氏（続）」『亜爾然丁時報』第138号、1927年１月８日

22）比嘉 2003：68

23）Schiller、Basch and Blanc-Szanton 1992：4-5

24）「西語欄開設に際して読者諸君に告ぐ」『亜爾然丁時報』第547号、1934年12月８日

25）比嘉 2003：68

26）José Ingenieros（1877-1925）医師、犯罪学者、哲学者、教育家やエッセイストとしてアルゼンチンのみならず、ラテンアメリカの思想界全体に多大な影響を及ぼした。

27）“Sermones Laicos de José Ingenieros”『亜爾然丁時報』第548号、1934年12月15日
28）Shinya、Yoshio “Llamamiento a la Juventud”『亜爾然丁時報』第549号、1934年12月22日
29）Biagini 1989：149
30）Shinya, Yoshio “Llamamiento a la Juventud”『亜爾然丁時報』第549号、1934年12月22日
31）20世紀初頭は「建国百周年」とされた時期であり、その際内外の作家、政治家と著名人が首都を「南米のパリ」と称えて、近代ヨーロッパ文明に範を取ってきた共和国の成功を謳った。アルゼンチンが北米合衆国に匹敵し得る世界的勢力になる道を歩みつつあるという確信が広く共有された。
32）Salas 1999：41-42
33）Varela 2011：3
34）Lacoste, Arpini 2002：126
35）G. Yoshio Shinya, *Imperio del Sol Naciente, Su Maravillosa Evolución Moderna*, Librería Cervantes, Buenos Aires, 1934。直訳すれば、題名が『日出る処の帝国　その偉大な近代発展』となるが、ここでは榛葉自身が翻訳した題名、『日本帝国の歴史、日本国民の特性、現代文明の状況』に依拠する（財団法人国際文化振興会1935：129）
36）Shinya 1934：17
37）今井 2006：26
38）Gasquet 2007：293
39）Shinya 1934：15
40）G. Yoshio Shinya, *Los Ideales del Japón*, Instituto Cultural Argentino Japonés, Museo Social Argentino, Buenos Aires, 1939.
41）榛葉は参照文献として、国際文化振興会が発行する次のようなものを挙げている。Torii, Ryuzo, *Ancient Japan in the Light of Anthropology (1935); A Guide to Japanese Studies: Orientation in the Study of Japanese History, Buddhism, Shintoism, Art, Classic Literature, Modern Literature* (1937); Hasegawa, Nyozekan, *Educational and Cultural Background of the Japanese People* (1936); Suzuki, Teitaro Daisetz, *Buddhist Philosophy and its Effects on the Thoughts of the Japanese People* (1936); Shinmura, Izuru, *Western Influences on Japanese History and Culture in Earlier Periods* (1540-1860) (1936); Harada, Jiro, *A Glimpse of Japanese Ideals : Lectures on Japanese Art and Culture* (1937). なおその他に、日亜文化協会の手でスペイン語訳された岡倉天心の『茶の本』、Okakura Kakuzo, *El libro del té: Versión Castellana*, Buenos Aires, Instituto Cultural Argentino-Japonés del Museo Social Argentino, 1938, 尾邦之助 著、*Histoire de la Litterature Japonaise*, Paris, Société Française d'éditions Littéraires et Techniques, 1935; そして岡倉天心の*The Awakening of Japan*や新渡戸稲造の*Bushido*も挙げられている。
42）小路田 1997：42
43）Shinya 1939：13
44）Shinya 1939：77
45）エルネスト・ラクラウ 2002：82。所見は　磯前順一 2010：52。
46）磯前 2010：52

47）Shinya 1939：72
48）海外同胞中央会 1941
49）ケネス 2010：249
50）1891年レオ13世が出した回勅、「労働者の状態について」である。“Rerum Novarum”とは、その冒頭部分、「新しい事」から取った通称となっている。カトリック教会が前教皇ピウス9世の反近代主義を改めて、初めて社会政策の必要性を認めたものである。資本主義や社会主義をともに批判しつつ、労働者の団結権を認め、キリスト教的連帯精神に立脚した労使の協調による解決を主張した。高橋進「レールム・ノヴァールム」川西正雄ほか編『角川世界史辞典』角川書店、2006年、1035ページ。
51）Shinya 1941：16-17
52）Shinya 1941：13
53）中南米とヨーロッパ十数ヶ国の間での不戦条約を率先し、ボリビア・パラグアイ戦争の調停を指導したことによる。
54）“Impresiones de mi Viaje II”『亜爾然丁時報』第1265号、1941年3月29日。
55）Fair 2009：120. なお、これらの言説のなかで南米における小ヨーロッパ的空間たる首都が世界的強国への飛込み台と想像されていた反面、内陸地方とりわけ中部や北部に住む先住民とその血を引くとされた混血のクリオリョが差別され、または無視・隠蔽されたことも指摘しなければならない。
56）Varela 2011：3
57）Rapoport 1995電子版。http://www1.tau.ac.il/eial/index.php?option=com_content&task=view&id=748&Itemid=285で公開。最終閲覧2014年12月23日。
58）“Argentina se Encamina Hacia la Gran Potencia”「未来の強国アルゼンチン」『亜爾然丁時報』第2009号、1943年9月29日
59）“La Grandeza Argentina”『亜爾然丁時報』第1587号、1942年7月4日
60）“Descúbrese el Imperialismo Norteamericano”『亜爾然丁時報』第2236号、1944年5月13日
61）“Japonizacion de la Democracia”「民主主義の日本化」『らぷらた報知』第303号、1951年3月13日
62）『らぷらた報知』1951年3月13日、同上
63）前山 1982：197
64）“Yoshio Shinya a traves de Violeta Shinya”『らぷらた報知』1979年9月27日
65）酒井 2015

参考文献

アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編『アルゼンチン日本人移民史』在亜日系団体連合会、2002年
亜爾然丁時報社『亜爾然丁時報』
磯前順一「「近代の超克」と京都学派――近代性・帝国・普遍性」酒井直樹、磯前順一編『「近代の超克」と京都学派――近代性・帝国・普遍性』以文社、2010年

今井圭子『アルゼンチンの主要新聞にみる日本認識』上智大学イベロアメリカ研究所、2006年
井上寿一『戦前日本の「グローバリズム」 1930年代の教訓』2011年、新潮社
伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う――現代移民研究の課題』有信堂高文社、2007年
エルネスト・ラクラウ「アイデンティティとヘゲモニー」ジュディス・バトラー、エルネスト・ラクラウ、スラヴォイ・ジジェク、竹内和子、村山敏勝訳『偶発性・ヘゲモニー・普遍性――新しい対抗政治への対話』青土社
岡部牧夫『海を渡った日本人』山川出版社、2008年
海外同胞中央会編『紀元二千六百年奉祝海外同胞東京大会報告書』1941年
賀集九平『アルゼンチン同胞五十年史』、誠文堂、1955
川西正雄ほか編『角川世界史辞典』角川書店、2006年
姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ――近代文化批判』岩波書店、2004年
ケネス・ルオフ著、木村剛久訳『紀元二千六百年――消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版
国際文化振興会発 編『財団法人国際文化振興会　設立過程及昭和九年度事業報告書』1935年
――――『財団法人国際文化振興会　昭和十年度事業報告書』1937年
――――『国際文化』第12号、1940年12月
小谷賢「日本軍とインテリジェンス――成功と失敗の事例から」防衛省防衛研究所編『防衛研究所紀要』第11巻、第１号、2008年11月
小路田泰直『日本史の思想　アジア主義と日本主義の相克』柏書房
社団法人日本ペンクラブ編『日本ペンクラブ三十年史』1967年
酒井直樹『死産される日本語・日本人 「日本」の歴史――地政学的配置』講談社、2015年
佐藤幸正「日本とアルゼンチンにおける榛葉贇雄とその家族」、『弘前学院大学英米文学』33号、2009年
芝崎厚士『近代日本と国際文化交流』有信堂、1999年
島崎藤村『藤村全集』第13巻、筑摩書房、1967年
社団法人アルゼンチン拓殖協同組合編『榛葉贇雄伝記』2000年
杉原達「ドイツにおける帝国意識――世紀転換期のオリエントとの関係を中心に」北川勝彦、平田雅博ほか編『帝国意識の解剖学』世界思想社、1999年
津田正夫 談話、内川芳美、春原昭彦 聴きとり「津田正夫――大役果たす協会初代事務局長」日本新聞協会編『別冊新聞研究――聴きとりでつづる新聞史』第10号、1980年４月
日本人アルゼンティン移住史編纂委員会編『日本人アルゼンティン移住史』1971年
比嘉マルセーロ「「私はアルゼンチン人です」――20世紀のアルゼンチンにおける日本人移民の下位世代のことばとアイデンティティ志向の形成をめぐる一考察――」日本移民学会編『移民研究年報』第９号2003年３月
ホセ・サンチス・ムニョス著、高畑敏男監訳『アルゼンチンと日本友好関係史』日本貿易振興会、1998年
前山隆『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会、1982年
松下洋『ペロニズム・権威主義と従属――ラテンアメリカの政治外交研究』有信堂高文社、1987年

らぷらた報知新聞社『らぷらた報知』

Azuma, Eichiro, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*, Oxford University Press, New York, 2005

Biagini, Hugo E., *Filosofía Americana e Identidad: El Conflictivo Caso Argentino*, Buenos Aires, Eudeba, 1989

Botana, Natalio R., *El Orden Conservador: La Política Argentina entre 1880 y 1916*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1985

Devoto, Fernando, *Nacionalismo, Fascismo y Tradicionalismo en la Argentina Moderna*, Siglo Veintiuno, Buenos Aires, 2002

――*Historia de la Inmigración en la Argentina*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 2003

Escudé, Carlos; Cisneros, Andrés, *Historia de las Relaciones Exteriores Argentinas*, Tomo IX, Buenos Aires, Centro de Estudios de Política Exterior, Consejo Argentino para las Relaciones Internacionales, Nuevohacer, Grupo Editor Latinoamericano, 1999. 電子版。http://www.argentina-rree.com/9/9-027.htm　最終閲覧2014年12月22日

Escudé, Carlos , El Fracaso del Proyecto Argentino: Educación e Ideología, Tesis, Instituto Torcuato Di Tella. Buenos Aires, 1990

Fair, Hernán, "El Mito de Argentina "País Potencia"", *Contribuciones desde Coatepec*, No. 16, enero-junio 2009, Universidad Autónoma del Estado de México, Toluca

Garbarini Islas, Gullermo, *Consideraciones sobre la Organización Político Económica de la República Argentina*, Instituto Cultural Argentino Japonés, Museo Social Argentino、Buenos Aires, 1938

Gavirati, Pablo Marcelo, *El caso del Periódico Argentin Djijo: Una Mediación entre las Formaciones Ideológicas de las Elites Argentina y Japonesa durante la Segunda Guerra Mundial*, Tesis de la Carrera de Ciencias de la Comunicación, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad de Buenos Aires, 2008

Gasquet, Axel, Oriente al Sur: El Orientalismo Literario Argentino de Estevan Echeverría a Roberto Arlt, Buenos Aires, Eudeba, 2007

Glick Schiller, Nina; Basch, Linda; Blanc-Szanton, Cristina,"Transnationalism: A New Analytic Framework for Understanding Migration", in *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered*, New York, Annals of the New York Academy of Sciences, Vol. 645

Higa, Marcelo G., *Desarrollo Histórico de la Inmigración Japonesa en la Argentina Hasta la Segunda Guerra Mundial*, Estudios Migratorios Latinoamericanos, Año 10, Número 30, 1995, pp. 471-512

――*Inmigrantes de Otros Puertos: Los Japoneses en Buenos Aires hacia 1910*, Gutman, Margarita, Reese Thomas Ed., *Buenos Aires 1910: El Imaginario para una Gran Capital*, Buenos Aires, Eudeba, 1999

Instituto Cultural Argentino Japonés, Museo Social Argentino, *Ciclo de Conferencias Dictadas*

en el Instituto y Correspondientes al año 1940,, Buenos Aires, 1939

Lacoste, Pablo; Arpini, Adriana, "Estanislao Zeballos, la Política Exterior Argentina, la Ideología Racista de la Elite Ilustrada Rioplatense y la Reforma Universitaria de 1918", *Revista Universum*, No. 17, 2002, Universidad de Talca, Talca

López-Calvo, Ignacio, ed., *One World Periphery Reads the Other, Knowing the "Oriental" in the Americas and the Iberian Peninsula*, Newcastle, Cambridge Scholars Publishing, 2010

Masterson, Daniel M., with Funada-Classen, Sayaka, *The Japanese in Latin America*, University of Illinois Press, 2004

Okakura Kakuzo, *El libro del té: Versión Castellana*, Buenos Aires,Instituto Cultural Argentino-Japonés del Museo Social Argentino, 1938

――*The Ideals of the East: With Special Reference to the Art of Japan*, New York, E.P. Dutton and Company, 1920

――*The Awakening of Japan*, New York, The Century, 1904

Rapoport, Mario,compilador, Nación-Región-Provincia en Argentina: Pensamiento Político, Económico y Social, Buenos Aires, Imago Mundi, 2007

――Argentina y la Segunda Guerra Mundial: Mitos y Realidades", *Estudios Interdisciplinarios de America Latina y el Caribe*, Volumen 6, N.1,Universidad de Tel Aviv, Tel Aviv, 1995電子版 http://www1.tau.ac.il/eial/index.php?option=com_content&task=view&id=748&Itemid=285　最終閲覧　2014年12月23日

Romero, José Luis, *El Desarrollo de las Ideas en la Sociedad Argentina del Siglo XX*, Ediciones El Solar, Buenos Aires, 1983

Said, Edward, *Orientalism*, London, Penguin Books, 2003

Salas, Horacio, "Buenos Aires 1910: Capital de la Euforia", en Gutman, Margarita, Reese Thomas Ed., *Buenos Aires 1910: El Imaginario para una Gran Capital*, Buenos Aires, Eudeba, 1999

Shinya,G. Yoshio, *La Verdad Sobre La Cuestión Manchuriana*, Librería Cervantes, Buenos Aires, 1933

――*Imperio del Sol Naciente, Su Maravillosa Evolución Moderna*, Librería Cervantes, Buenos Aires, 1934

――*Pequeña Contribución a la Grandeza Argentina*, Buenos Aires, 1935

――*Potencialidad Económica del Japón*, Buenos Aires, 1938

――*Los Ideales del Japón*, Instituto Cultural Argentino Japonés, Museo Social Argentino, Buenos Aires, 1939

――*El Concepto Invariable del "Estado Familia" en Japón*, Buenos Aires, 1941

Tulio Halperin Donghi, *La Argentina y la Tormenta del Mundo: Ideas e Ideologías entre 1930 y 1945*, Buenos Aires, Siglo Veintiuno Editores, Argentina, 2003

Varela, Pilar Valot, "La "Argentinidad" de José Ingenieros", *VIas Jornadas de la Historia de las Izquierdas "José Ingenieros y sus mundos"*, Mesa 5, "Nación y modernidad en José

Ingenieros", Centro de Documentación e Investigación de la Cultura de Izquierdas, Universidad Nacional de San Martin, 2011

Villalicencio, Susana, *Los Contornos de la Ciudadanía, Nacionales y Extranjeros en la Argentina del Centenario*, Eudeba, Buenos Aires, 2003

（ファクンド　ガラシーノ　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）